

令和 2年 4月 16日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980509

氏 名 野手洗 悠紀

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ブリストル (国名 英国)
2. 研究課題名 (和文)：戦間期イングランドにおける健康言説と有機農業—代替医療運動を事例に—
3. 派遣期間：令和 元年 10月 1日 ~ 令和 2年 3月 21日 (173日間)
4. 受入機関名・部局名：ブリストル大学 Department of History
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今回派遣先で行った研究内容は主として史資料収集である。当初の計画であったブリストルのイギリス有機農業団体ソイル・アソシエーション、ロンドンの英国図書館に加えて、イギリス公文書館、レディング大学に併設されるイギリス農村生活博物館およびレディング大学図書館、オックスフォード大学ボードリアン図書館を訪問し、資料の閲覧と収集を行った。

ソイル・アソシエーションには受け入れ教官であるペーター・コーツ教授が仲介してくださったことで円滑な資料調査が可能となった。同協会では有機農業実践家の著作や協会の機関紙 *Mother Earth*(1946-1968)に加えて、未刊行の議事録や実験農場における報告書についても収集することができた。

次に訪れたロンドンの英国図書館はイギリス国内で最大の所蔵数を誇る図書館であり、有機農業研究に関する博士論文をはじめとする査読論文や、二次資料を中心に閲覧を行った。さらに、代替医療運動従事者らが発行した書籍やブックレット、雑誌の閲覧および収集も行った。医学に関する書籍を多く所蔵するウェルカム図書館へも訪問予定であったが、閲覧予定であった資料がオンラインで閲覧可能になったため、実際の訪問は行わなかった。当初の計画ではパイオニア・ヘルス財団に訪問し史料収集および聞き取り調査を行う予定であったが、その代わりとしてイギリス有機農業史家であり、代替医療運動研究に従事するフィリップ・コンフォード博士からパイオニア・ヘルス・センターに関する論考および史料を受け取り、話を伺うことができた。

また、後述のイギリス有機農業研究者に勧められ、レディング大学図書館を訪れた。レディング大学はイギリスにおいて農業分野で有名な大学であり、農業に関する有数の蔵書を保有する。併設のイギリス農村生活博物館ではイギリス農業および農村生活についての展示が見られ、有機農家についても説明がなされていた。レディング大学図書館では農業の統計資料や二次資料だけでなく、ソイル・アソシエーションの創始者のひとりであったJ.E. ホスキングについての資料を集めたJ.E. ホスキングコレクションを閲覧した。このコレクションはホスキングについて書かれた雑誌や新聞の切り抜き、および未刊行のものを含むホスキングによる原稿や手紙から構成されていた。

最後にオックスフォード大学のボードリアン図書館においては代替医療運動従事者らが発行した雑誌の記事を追加収集した。例えば *The Healthy Life*(1911-1932)および *Health and Life*(1934-1967)である。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究成果発表については、現在新型コロナウイルスの流行を受けて国内外の学会および研究会が延期・中止になっていることから、具体的な見通しを立てることができていない。しかしこのような状況ではあるが、2021年2月に京都大学で開催予定の東アジア環境史学会において、個別の研究報告をする見込みである。

また、今回収集した史料の一部である戦間期に自然療法医が代替医療に関心を持つ労働者階級を対象に出版したブックレットシリーズ *First Aids to Health Booklet* (1914-1941) 全37冊を用いて、同志社大学の服部伸先生が編集する医療史が主題の論集に寄稿する。論文タイトルは「戦間期イギリスにおける「健康になるためのマニュアル」—自然療法医の食と健康観」であり、この論集は来年2月に刊行される予定である。本論考はイギリス戦間期の代替医療運動に従事する自然療法医が食事療法を用いて労働者階級のプライベートな生活、とくに食に対して介入し規律化を試みていたことをフーコーの「生権力」の概念を用いて分析したものである。

また、収集した代替医療運動従事者らが出版した自然療法に関する雑誌 *The Healthy Life* (1911-1932) および *Health and Life* (1934-1967) のうち、戦間期に出版された記事を分析し、自然療法医らがいかなる言説をもって有機農業を推し進めたかについて、査読論文として史学研究会の会誌『史林』に「戦間期イングランドにおける健康言説と有機農業—代替医療運動を事例に一」と題して投稿する予定である。

同様に戦間期の健康食品や代替医療に関する雑誌記事および広告を分析することで、自然療法や有機農産物の市場が形成していく過程を明らかにし、フードシステム学会の会誌『フードシステム研究』に投稿する予定である。戦間期でも特に1930年代に入ると健康食品や有機農産物を扱う自然食品店やレストランがロンドンのみならず、イギリス国内の各都市で急増していることが広告分析を通して現時点までにわかっている。

以上の内容に有機農業従事者らによる著作の分析を加え、申請者のこれまでの研究とあわせて、博士学位請求論文(「戦間期ヨーロッパにおける有機農業の歴史的研究—理念と実践のあいだ—」)としてまとめ、2021年9月に京都大学大学院農学研究科に提出する予定である。申請者はすでにドイツの有機農業の系譜のひとつについて、明らかにしており、ドイツ有機農業とイギリス有機農業を比較することで戦間期ヨーロッパ有機農業の全容を明らかにする。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

先述のように本プログラムに採用され、イギリスに派遣されたことで、申請当初に計画していたよりも多くの資史料を収集することができた。資料の中にはオンラインで閲覧できるものも存在したが、大多数は実際に図書館や資料館に赴いて閲覧する必要があった。史資料調査の際には、イギリス国内にいる有機農業史および環境史の研究者らの助力を得ることができ、より効率的に進めることができた。

受け入れ教官であるペーター・コーツ教授が他の有機農業研究者や環境史家との仲介を積極的に行ってくださったため、研究者ネットワークへの参加が容易となった。一人はイギリス有機農業史の大家であるフィリップ・コンフォード博士であり、彼は長らくソイル・アソシエーションの会員であったこともあり、戦間期におけるイギリス有機農業運動や代替医療運動に関する資料についてのみならず、先行の有機農業研究やイギリス国内における有機農業の現状などについても、多くの知見を得ることができた。

もう一人は有機農業史家でソイル・アソシエーションについて研究するギル・エリン博士である。彼女は研究計画に対して助言をくださり、有機農業の資料を多く保有する場としてレディング大学図書館への訪問を推奨してくださった。

さらに、コーツ教授の仲介で環境史研究会へも参加することができた。ブリストル大学歴史学部の講義に参加するのみならず、ブリストル大学歴史学部の教員が中心となって結成されている環境史研究会へ参加することで、農業史に限定されない環境史の幅広い視野を獲得することができた。水資源や森林資源の管理を行う人間の営みについて学ぶことで、生態系を管理しようとする有機農業について再考することを促された。